

春燈



7

主宰の句

安立公彦

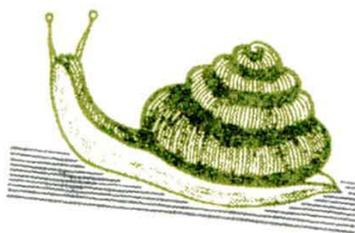
濤音を統べて遅日の暮光かな

ゆく春や渚に消ゆる下駄の跡

旅人にとほく身を置き通し鴨

古墳百基夜は初夏の星かざす

薔薇の苑プリンセス・サヤコの紅ほのと



燈下集

○ 小嶋 恵美

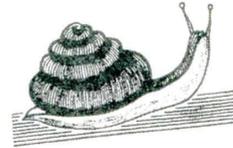
義経を語り継ぐかや蘆の角
咲いて落つそれだけのこと藪椿
雪形や厩に馬の居りしころ
夕ざくら仰ぐ眼鏡を外しけり
無心とはこんな姿か滝ざくら

○ 三宅 文子

海風を孕みて島の鯉のぼり
亀石を鳴かせてみたき島日永
海光と伝説の島鳥帰る
糸遊やビデオの真砂女恋語る
鯛せんべい食み房総の春惜しむ

○ 太田 慶子

地に描く落花曼陀羅踏むまじき
春の鳥身に余りたる物くはへ
潮鳴りや肩の高さに白子干す
夜の雲のしなやかに過ぐ春田かな
濡るる時息止めてをり甘茶仏



○ 寺村 年明

麦秋や引き込み線に貨車一つ
雲切れて代田の水の耀へり
恋終へて化石のやうに眠る猫
畠中の真夜の人声霜くすべ
頬刺ののけ反つて海見てゐたり

○ 藤原繁子

播州の春をいやます版画展(祝)

「蟹工船」読継ぐ花の車中かな

茶畑やかつて特攻隊発ちし

戻り来て寝てばかりなり恋の猫

天国に下町ありや荷風の忌

○ 佐橋敏子

すぐその近くて遠き目借時

春水を流して洗ふ皿一枚

わたつみの返す白波夕燕

真砂女在らず安房の海原臙濃し

鰐口のぐわらんぐわらんと春逝かす

○ 中島節子

青饅や父の遠忌の母小さし

散る花に六臂の舞や阿修羅像

流れゆくスーラの点描花筏

紙兜かぶりて吾子も武者人形

川風に目覚め玉解く芭蕉かな

○ 橋本リエ

試歩の目に飛び込んで来し燕かな

桃の花それと見えけり遠目にも

ほぐれつつほぐしつつ植う苗木かな

強がりのこのころもとなき春の雷

屋上を渡りし風も立夏かな

○ 青柳雅子

二挺艦の五分といへど春の航

大蘇鉄松の花粉に噎びけり

耕すや仁右衛門三十八代目

老鶯の虚々実々を語りけり

恋に生く真砂女眩しき夏衣

○ 木多芙美子

花筏ふれあひて音なかりけり

こちやえ節風が棹さす花筏

何やかや忘れ桜の渦の中

本心とは別の貌せり春シヨール

八十八夜もの言ひたげな壺の口

○ 南 幸子

棒きれのあれば文字かく春の浜
うべなへぬ一恙のあり花の冷
金管の融け合ふびびき風薫る
図書館の椅子深くをり若楓
白牡丹その夜の雨を憂ひけり

○ 西山 浅彦

茶摘唄ときをり沖の光りけり
今朝聞きしばかりの人事蘆の角
桜蕊降る夜の夢の色もたず
春挽糸日暮るる軒となりにけり
渡り漁夫海の底ゆく汽車に寝て

○ 小張 志げ

ふらここや富士塚天辺一つ漕ぎ
柿若葉雨後の瓦の照り返し
夏蕨脇往還のみちしるべ
青空へ十人十色の茶摘唄
夕つゝのる風に植田のしじら波

○ 江草 礼

安房の夏近し一線の波頭
川底の乱数表や蝌蚪生る
山藤のからみし松のやつれかな
糸底の薄き手触り新茶かな
筍の三、四本をもてあます

○ 見田 英子

残雪の嶺々やミサイル天翔ける
囁き合ひてうなづき合ひて蟻の列
菖蒲湯に固き蹠をほぐしけり
居敷当替へてかたみの上布かな
でで虫の胸三寸を想ひけり

○ 長谷川 友子

川風をゆつくり紡ぐ糸ざくら
春告鳥火の番替る登り窯
花の下知己の如くに言交し
青き踏む亡き師の一句歳時記に
花の屑舞はすビル風退社ベル

○ 白杵游児

妻の手のひどく冷たし花の山

骨壺を焼く登り窠花ぐもり

大鯉の眼に泪あり花の冷え(樽尾形仇氏)

迦楼羅カルーダの面いかめし壬生の鉦

天満宮に寄席新しき宗因忌

○ 岩永はるみ

惜春や汐さび著き真砂女句碑(鴨川二句)

若葉風素手もて払ふ句碑の塵

老犬の濁りたる目や桜草

はるかなる一湾青き茶摘かな

春夕焼さいごの渡し戻りけり

○ 林 紀夫

鳥雲に家紋崩るる鬼瓦

初つばめ指呼の間合の島の影

島主の古き屋敷や松の花

春愁や消してもみたき波の音

行く春や床屋の椅子に一眠り

○ 割田容子

壬生の鐘宿の小部屋を素通りす

仁清の「不二の香合」松の花

永き日の二丁櫓の舟眠たしや

家郷なる雲の流れよ春深し

晩霜や踏んばつて立つ妙義山

○ 小泉貴弘

大雪山の風まだ硬き厩出し

淡雪のひとひら地まで見つめけり

村びとのこころの空虚鶴引きぬ

苔まとふ椎の神木風光る

踏まれても踏まれてもなほたんばば黄

○ 戸辺信重

俳聖の通りし道や松の芯

三椏や花と花との佳き間合ひ

種痘痕まだ消えざるよ更衣

飛行船黙して過ぐる初夏の空

自転車の車輪は穂隠れ麦の秋

当月集

安立 公彦選



○ 赤羽陽子

ひとときを手漕ぎの舟に春惜しむ

うぐひすの姿捉へし島の昼

すれ違ふ舟に手をふる日永かな

暮るるまで海を見てゐる春日傘

朧夜の月を眺めて安房の旅

○ 小山繁子

春の波幾重の音を重ねけり

花は葉に児を追ふ保母の日課かな

隠れ咲く浜屋顔も一會かな

田水張るや風のさ走る千枚田

島びとの網干す暮しみなみ風

○ 都丸美陽子

髪梳いて闇に身を置く朧かな

黄の著き島のたんぼ踏むまじく

老鶯の人恋うて鳴く島なりけり

小鰯刺真砂女の恋の浜辺かな

夜はさらに波音たかき卯波かな

○ 吉村さよ子

暮れかぬるビルのかげより飛行船

春陰や鉄塔ばかり迫り来る

神主の跨ぐ春泥地鎮祭

田をめぐる水路の競ふ穀雨かな

松の花潮湿りの髪を梳く

○ 川崎真樹子

神は黄を細かに裂きて蒲公英に

狛犬の鼻息荒き立夏かな

夏めくや薩摩切子に盛るサラダ

青嵐野生いささか目覚めけり

カーネーション彼岸の母の沙汰もなし

春燈の句

安立 公彦選

測量の杭打つ音や受難節

京都 片山 博介

遠足の子の飛石に一人つつ

春惜しむ雁のかたちの釘隠

ビー玉に透く泡粒も夏隣

麗かや真砂女の海につつまれて

潮風や島のだんぼぼ茎長し

鰐口の大き一打や夏近し

貝殻の畑に浮立つ穀雨かな

匂ひ立つ真砂女の句碑や清和の天

青葉潮読経を返す神楽岩

卯月波仁右衛門島の岩に果つ

白日傘真砂女の浜を歩きけり

春雷や返し忘れし部屋の鍵

不器用な紅差し指や春の風邪

八頭身のバービー人形昭和の日

東京 矢口 笑子

東京 清水 美子

千葉 西岡 啓子

惜春や本の余白の覚書

晴れやかな安房の卯波に迎へらる

眼裏に安房の渚の遅日かな

親闈式の土埃せし昭和の日

暮の春「大原御幸」に涙はも

春月に鱗びかりの棚田かな

淋しさを光としたり螢烏賊

夕されば幽花となりぬ糸桜

春雨や瓦に残る布目あと

江戸前の鮪万太郎忌なりけり

雀の子まろびよるけつ翔び立てり

みどり児の頸の坐らず亀鳴けり

花冷やとかく引つ込み思案にて

道問へば菜の花越しの安房訛

枇杷青し鷗のはこぶ風の唄

東京 木村 梨花

東京 本田 保

千葉 長戸 路子

神奈川 河本由紀子



余言

安立公彦

一盞を真砂女に献じ春惜しむ

佐藤 信子

春の勉強会は盛会だった。「鈴木真砂女七回忌追悼俳句大会」の名にふさわしい句会であり懇親会であった。世話役の皆さんのご苦勞に対し、この欄を借りて改めてお礼を申し述べます。

この句、大会の出句を代表する一句である。真砂女への追悼の思いと、在りし日の真砂女を称える気持が、格調高く表現されている。

ひとときを手漕ぎの舟に春惜しむ
すれ違ふ舟に手をふる日永かな

赤羽 陽子

//

吟行地の一つである仁右衛門島へは、大海の渡船場から二丁艫の平舟で五分。この句の「ひととき」そのものであ

る。しかし舟に乗り合わず人は、距離に拘らずみな同舟の徒。すれ違ふ舟に手を振ることも自然な仕種となる。「春惜しむ」「日永かな」が良く一句を支えている。

春の波幾重の音を重ねけり

小山 繁子

安房鴨川の渚に寄する太平洋の波音をみごとに言い止めている。「幾重の音を重ねけり」は真実の言葉だ。よほど詞藻の充実しているときでないかと詠めない表現である。何よりも作者の感動が伝わってくるのがいい。

髪梳いて闇に身を置く朧かな

都丸美陽子

女性が髪を梳く姿は、古来幾多の美術品に昇華されて来た。日本画なら、鍋木清方、伊東深水の世界である。

この句、「闇に身を置く」がみごとだ。一日の安堵の思いがよく出ている。折しも朧の夜。へくらき方はけづるがごとしはるの月 暁台の句そのものの背景を思い出させる句と言えよう。姿美しい一句である。

松の花潮湿りの髪を梳く

吉村さよ子

髪を梳く句だが、美陽子句のような情趣はない。海近くの松林を歩いていて、潮気に湿った髪を梳いているという

スケッチ風の句。ただスケッチ風だけに、一句にきびきびとした動きが感じられ、それがこの句を生かしている。

俳句は一瞬を言い止める詩型だ。言い止めた表現は「動き」を背景としている。そこに作者自身の姿勢が浮かぶのである。近頃投句の中に、作者の思いの感じられない句が見かけられる。何を詠みたいのか捉えどころのない句。それは一にかかつて表現の曖昧さにある。

神は黄を細かに裂きて蒲公英に

川崎真樹子

この作者を「余言」に取りあげるのは三度目である。一句の表現が従来の俳句の基本をなす「写生」から抜け出している。抜け出していて、しかし句意はブーメランのように「写生」に戻る。

この句「蒲公英」を詠んでいて、実は「神」に思いを致しているのだ。上五中七に、神の造化の手遊びを垣間見る驚きが表現されている。ただ十七文字の詩型としてはこの辺りが限界である。しかしこの作者には、夏めくや薩摩切子に盛るサラダのような正統的な句もある。さらに「カーネーション彼岸の母の沙汰もなし」の句は、右の二句とも全く別種の句。この「彼岸」は「此岸」に対するもの。故人となった母への思いを、こういう形で詠むところ、この作者の特異性がある。

世の音を絶ちて辞書繰る春障子

曾根 京子

「辞書繰る」がいい。おそらく俳句を案じている最中の所作だろう。「世の音を」「春障子」とあるから、時間的には日中、それも昼近い頃か。季語の「春障子」がよく効いている。静けさの中に明るさが感じられる。

私たちは句作の際、季語をあれこれと選ぶ。しかし季語は本来作者を待っているのだ。ただ当然のことだが季語の方からは歩み寄らない。作者を待つ季語と、一句に用いる季語を真摯に考える作者が出会ったとき、その俳句は佳句への一步を踏み出すのである。

初鯉届きし夜のひとり酒

伊藤 百江

「ひとり酒」には孤愁の思いがあるが、「初鯉届きし」によって、作品は彩りを増す。俳句は基本的には「私」を詠む詩型である。初鯉を送ってくれた相手を考えながら、ひとり酒を酌むとき、安らぎの思いが湧く。

夕されば幽花となりぬ糸桜

長戸 路子

「糸桜」は「枝垂桜」。市川真間の弘法寺に建つ富安風生の句碑へまさをなる空より枝垂桜かなは有名だ。

作者の句は対照的に糸桜を幽界の桜と捉えている。「夕されば」も、「糸桜」も、「幽花」をよく支えている。爛漫と咲く桜、灯火にゆらぐ妖艶な桜、この句に見られる幽界に咲く桜。ともに桜の百様である。